

原 著

全国の看護系大学，短期大学，専門学校に所属する 新人看護学教員が役割遂行上直面する問題の解明

高橋美穂子，山下暢子，松田安弘

群馬県立県民健康科学大学

目的：新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を明らかにし，その特徴を考察する。

方法：全国の看護系大学，短期大学，専門学校に所属する2年目，3年目の教員543名を対象に，郵送法により質問紙を配布し，330名（回収率60.8%）から回答を得た。このうち，自由回答式質問に回答していた231名の記述を，Berelson.B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用いて分析した。

結果：【教育・看護実践経験の乏しさによる学生への指導難航】【教育と研究の両立困難】など42カテゴリが形成された。

結論：新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を表す42種類が明らかになった。また，これらの問題は，《教育・看護実践・研究経験の乏しさ》など8つの原因により生じるという特徴を示した。本研究の成果は，新人看護学教員が自身の直面している問題を客観的に理解し，問題解決の方向性を自ら見出すための資料となる。

キーワード：新人看護学教員，役割遂行，直面する問題

1. 緒 言

新人看護学教員は，学生の教育目標達成に向けて支援をしている一方で，学生の質問に対して分かりやすい言葉で回答することが難しい¹⁾，学生のレベルに合わせた実習指導ができない²⁾など，教育役割に伴う困難を抱えている。また，実習指導者との調整ができず学生を混乱させる³⁾，研究時間を確保できず予定通りに進行することができない⁴⁾，組織を管理的な視点で考えたことがない⁵⁾，などの悩みや困難も感じている。これらは，教育の場へと職場を移した新人看護学教員が，教育役割のみでなく多種多様な役割を求められ，その遂行上，様々な問題に直面している現状を示す。

このような新人看護学教員が，効果的な役割遂行に向けて，問題解決の方向性を見出すには，まず，自身がどのような問題に直面しているのかを客観的に理解する必要がある。また，問題を客観的に理解するためには，教育の場へと職場を移した，全国の看護系大学，短期大学，専門学校に所属する新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を網羅した研究成果が有用である。問題を網羅できた時，それは，すべての新人看護学教員の問題理解に活用できる。

現在，新人看護学教員が感じる困難や悩み，困っていることなどを明らかにした研究は複数存在する⁶⁻⁹⁾。これは，新人看護学教員が何らかの問題に直面し，それにより困難や悩み，困っているこ

とを感じてしまう現状があることを示す。

また、経験年数を問わず看護学教員が直面する問題を包括的に明らかにした研究¹⁰⁾も存在する。この研究が明らかにした問題のいくつかは、新人看護学教員にも共通する可能性が高い。しかし、この成果のみでは、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を詳細に理解するには限界がある。

以上に基づく本研究は、臨床から教育の場へと職場を移した、全国の看護系大学、短期大学、専門学校に所属する新人看護学教員が役割遂行上直面する問題の解明を目指す。この研究成果は、新人看護学教員が自身の役割遂行上直面する問題を客観的に理解することに役立つ。また、効果的な役割遂行に向けて、問題解決の方向性を自ら見出すために活用できる知識となる。

II. 研究目的

新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を明らかにし、その特徴を考察する。

III. 用語の定義

1. 新人看護学教員 (novice nursing faculty member)

新人看護学教員とは、看護師免許を取得し、看護基礎教育機関に所属して看護学に関わる学科目の教授活動を展開する者であり、教員となって1年未満の教員である¹¹⁾。

2. 役割遂行 (role performance)

役割遂行とは、ある状況の中で役割を担っている人がとる実際の行動をいう¹²⁾。役割とは、集団や社会のある地位に付随し、その集団や社会によって期待され、行為者によって取得される行動様式のことであり¹³⁾。

3. 問題 (problem)

問題とは、ある目標に到達しようとしている、あるいは現在の状況を変更して、現在とは異なる状況にしようとしているものの、その試みがうまくいかないという事態^{14,15)}である。

IV. 研究方法

1. 研究対象者

全国の看護系大学、短期大学、専門学校に所属する経験1年以上3年未満の看護学教員を研究対象とした。「経験1年未満の教員」は、問題直面の渦中にあり、自身の問題を十分に言語化できない可能性が高い。これは、対象者を「経験1年以上を有する教員」とする必要を示す。しかし、過去に遭遇した出来事、人々、物事などに関する記憶は、1年間に5%ずつ忘れ去られる¹⁶⁾。これは、経験の累積に伴い、問題の想起が困難になっていく可能性を示す。そこで本研究は、対象者を経験1年以上3年未満に限定した。それは、経験3年未満に限定することで、「経験1年未満」に直面する問題の90%程度の想起を可能にするためである。

また、本研究は、多様な背景から構成される新人看護学教員を対象とするため、教育機関やその種類、職位は限定しないこととした。

2. 測定用具

測定用具は、以下の①②により構成される質問紙を作成した。

①新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を問う質問。

具体的には、まず、直面した問題の有無を問う選択回答式質問に対し、「ある」「ない」の選択回答を求めた。

次に、選択回答式質問に「ある」と回答した対

象者に対し、その内容を問う自由回答式質問を用いた。具体的には、「その時のあなたが直面した問題は、どのような問題でしたか。できるだけ具体的にお書き下さい。いくつお書きいただいても結構です。」とした。

②対象者の特性を問う質問。

測定用具の内容的妥当性は、専門家会議とパイロットスタディにより確保した。

3. データ収集

文献検討に基づき、研究結果の一般化が可能な範囲のデータを得るため、全国の看護系大学、短期大学、専門学校から層化無作為抽出法を用いて610校を抽出した。抽出した学校の教育管理責任者に往復はがきを用いて研究協力を依頼し、承諾を得た234校の教育管理責任者宛に、質問紙等を送付した。質問紙は、返信用封筒を用いた個別投函により回収した。データ収集期間は、平成28年5月22日から平成28年7月28日であった。

4. データ分析

1) 「全国の看護系大学、短期大学、専門学校に所属する新人看護学教員が役割遂行上直面する問題に関する質問紙」への回答の分析

分析には、Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析¹⁷⁾を用い、次の通り行った。まず、「研究のための問い」を「新人看護学教員は、役割遂行上どのような問題に直面しているのか」と設定した。また、「問いに対する回答文」を「新人看護学教員は、役割遂行上（ ）という問題に直面している」とした。

次に、新人看護学教員の自由回答式質問に対する記述全体を文脈単位とし、『新人看護学教員が役割遂行上直面する問題』を表す1内容を1項目として含む単語、フレーズ（句）、文章を1記録単位として分割した。次に、同一の表現の記録単位、表現は異なるが意味内容が同一の記録単位を集

約・整理し、同一記録単位群とした。この際、研究のための問いに対応していない、あるいは、表現が抽象的かつ意味が不明瞭な記録単位は理由を明記し、除外した。さらに、個々の同一記録単位群を意味内容の類似性に基づき分類し、その類似性を的確に表す表現をカテゴリネームとして置き換えた。最後に、各カテゴリに包含された記録単位の出現頻度を数量化し、カテゴリ毎に集計した。

2) 対象者の特性を問う質問への回答の分析

対象者の特性を分析するために、Microsoft Excel 2013を用い、記述統計値を算出した。

5. カテゴリの信頼性の確認

Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用いた研究経験、教員経験を持つ看護学研究者2名に、カテゴリへの分類の一致率算出の協力を依頼した。Scott, W.A.の計算式¹⁸⁾を用いて一致率を算出し、信頼性の確保の基準を70%以上とした。

6. 倫理的配慮

対象者の負担を最小限にするため、専門家会議の実施により質問紙の内容的妥当性を検討した。また、対象者の情報を得る権利を保障するため、研究の目的と意義、質問への対応方法、研究結果の公表予定などを書面にて説明した。対象者の自己決定の権利を保障するため、個別投函により質問紙を回収した。また、質問紙の返送を以て研究協力を同意が得られたものとするを明記した。さらに、対象者に関する個人情報を守秘するため、回答内容を分析する際は、統計処理およびデータを記号化した。なお、本研究は、群馬県立県民健康科学大学倫理委員会の承認を得て実施した。

V. 研究結果

研究協力の承諾が得られた234校の教員543名

表 1 対象者の特性

n = 231

対象者特性項目		項目の範囲・種類・度数・平均・標準偏差・百分率		
臨床経験年数		1 年以上 36 年未満		平均 14 年 (SD=7.6)
看護教員養成研修受講有無	受講した	80 名 (34.6%)	記載なし	4 名 (1.7%)
	受講していない	147 名 (63.6%)		
所属する教育機関	専門学校 2 年課程	26 名 (11.3%)	その他	3 名 (1.3%)
	専門学校 3 年課程	112 名 (48.5%)	大学	80 名 (34.6%)
	短期大学 3 年課程	8 名 (3.5%)	記載なし	2 名 (0.9%)
教員経験 1 年目の職位	専任教員	131 名 (56.7%)	講師	6 名 (2.6%)
	助手	39 名 (16.9%)	その他	6 名 (2.6%)
	助教	49 名 (21.2%)		

に質問紙を配布し、330 名より返送があった（回収率 60.8%）。研究対象者の条件を満たし、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を問う自由回答式質問に回答した 231 名の回答を分析対象とした。

1. 対象者の特性（表 1）

本研究の対象の特性は、次の通りであった。臨床経験年数は、1 年以上から 36 年の範囲であり、平均 14 年（SD=7.6）であった。また、所属していた教育機関の種類は、専門学校 2 年課程、専門学校 3 年課程、短期大学 3 年課程、大学等であった。さらに、教員経験 1 年目の職位は、専任教員、助手、助教、講師等であった。

2. 新人看護学教員が役割遂行上直面する問題

（表 2）

対象者 231 名の記述は、231 文脈単位、624 記録単位に分割できた。624 記録単位のうち、233 記録単位は、新人看護学教員自身以外の問題、抽象的な記述、意味不明な記述であり、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を記述していなかった。そのため、これら、233 記録単位を除く 391 記録単位を分析対象とした。

分析の結果、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を表す 42 カテゴリが形成された。

以下、42 カテゴリのうち、記録単位数の多いものから順に結果を論述する。なお、【 】内はカ

テゴリを表し、[] 内は各カテゴリを形成した記録単位数とそれが記録単位総数に占める割合を示す。また、「」内は、記録単位を表す。

【1. 授業設計と展開方法不明瞭】

〔49 記録単位：12.5%〕

このカテゴリは、「授業計画案の立て方がわからない」などの記述から形成された。

【2. 学生の個別性把握とそれに応じた指導難航】

〔32 記録単位：8.2%〕

このカテゴリは、「学生の個別性を考えて看護学実習ができない」などの記述から形成された。

【3. 業務内容不明瞭なままでの業務遂行】

〔28 記録単位：7.2%〕

このカテゴリは、「毎日の勤務の中、自分が何をすべきか分からない」などの記述から形成された。

【4. 他教員からの適切な支援獲得困難による円滑な業務遂行不可】

〔19 記録単位：4.9%〕

このカテゴリは、「教員としての業務のあり方を誰も教えてくれない」などの記述から形成された。

【5. 業務量過剰による私的時間での余儀なき業務遂行】

〔16 記録単位：4.1%〕

このカテゴリは、「プライベートが仕事の時間になる」などの記述から形成された。

【6. 臨床看護師とは異なる教員としての業務への適応困難】

〔15 記録単位：3.8%〕

このカテゴリは、「臨床と異なる教員としての業務内容の把握が難しい」などの記述から形成された。

表2 カテゴリと記録単位数

n = 391

番号	カテゴリ名	記録単位数 (%)
1	授業設計と展開方法不明瞭	49 (12.5%)
2	学生の個別性把握とそれに応じた指導難航	32 (8.2%)
3	業務内容不明瞭なままでの業務遂行	28 (7.2%)
4	他教員からの適切な支援獲得困難による円滑な業務遂行不可	19 (4.9%)
5	業務量過剰による私的時間での余儀なき業務遂行	16 (4.1%)
6	臨床看護師とは異なる教員としての業務への適応困難	15 (3.8%)
7	教育に関する必要知識不足下での余儀なき授業実施	15 (3.8%)
8	実施した指導と評価の適切性への確信不可	15 (3.8%)
9	他教員との接触機会稀少による必要な教示獲得困難	14 (3.6%)
10	教授活動の改善に活用可能な他教員からの支援獲得困難	14 (3.6%)
11	学生との適切な距離感維持困難	13 (3.3%)
12	上司からの理不尽な業務配分の受理	12 (3.1%)
13	実習目標達成に向けた看護スタッフとの連携困難	10 (2.6%)
14	新人看護学教員のための組織的な支援獲得不可	10 (2.6%)
15	教育・看護実践経験の乏しさによる学生への指導難航	9 (2.3%)
16	自身の専門分野とは異なる授業の実施難航	9 (2.3%)
17	教育と研究の両立困難	9 (2.3%)
18	学校組織特有の慣習への円滑な適応困難	7 (1.8%)
19	学生に教えるべき水準不明瞭と自身の思考伝達困難	7 (1.8%)
20	多様な業務担当による優先度と時間の調整方法不明瞭	7 (1.8%)
21	看護師国家試験対策の補講内容提供困難	7 (1.8%)
22	他者との教育観・看護観の不一致	7 (1.8%)
23	実習指導者とは異なる教員としての実習指導困難	6 (1.5%)
24	授業準備と自己学習に投入すべき時間の過剰	6 (1.5%)
25	学生が主体的に学習できるような指導困難	6 (1.5%)
26	教育機関での年間予定把握不可による計画的な業務遂行困難	6 (1.5%)
27	グループワーク中の学生への効果的な助言不可	5 (1.3%)
28	看護学生として備えるべき態度の指導方法不明瞭	5 (1.3%)
29	指導力不足による学生・院生への申し訳なさ	4 (1.0%)
30	教員としての自身の役割遂行状況の自己評価難航	4 (1.0%)
31	上司・先輩との関係形成困難	3 (0.8%)
32	実習期間の多様な業務重複による心身の苦痛	3 (0.8%)
33	上司への適切な報告困難	3 (0.8%)
34	学生の看護現象の理解に結びつくような説明困難	3 (0.8%)
35	教育理念やカリキュラムをふまえた指導への確信不可	2 (0.5%)
36	臨床の工夫の説明欲求と学習内容強化義務との葛藤	2 (0.5%)
37	担当グループ学生への公平な実習指導不可	2 (0.5%)
38	実習中の不利益からの学生擁護不可	2 (0.5%)
39	成績不振学生の保護者への対応不明瞭	2 (0.5%)
40	実習施設の既知のスタッフとの関係性変化による適切な距離感維持困難	1 (0.3%)
41	授業計画案作成への時間投入による他教員への余儀なき業務依託	1 (0.3%)
42	研究業績不足による研究指導役割担当不可	1 (0.3%)
記録単位数総数		391 (100.0%)

【7. 教育に関する必要知識不足下での余儀なき授業実施】 [15 記録単位：3.8%]

このカテゴリは、「教育というものがどういふものか分からないまま、授業を行わなければならない」などの記述から形成された。

【8. 実施した指導と評価の適切性への確信不可】 [15 記録単位：3.8%]

このカテゴリは、「他の教員がどのような視点で成績を出しているのか分からないため、他の教員が担当した学生と成績の差異が出るのではないかと迷う」などの記述から形成された。

【9. 他教員との接触機会稀少による必要な教示獲得困難】 [14 記録単位：3.6%]

このカテゴリは、「分からないことについて聞きたいが、他の教員も忙しいためあまり聞けない」などの記述から形成された。

【10. 教授活動の改善に活用可能な他教員からの支援獲得困難】 [14 記録単位：3.6%]

このカテゴリは、「演習を自身が主で行うが、終了後、学生にとってよかったか、不足のところはないかなどアドバイスは一切ない」などの記述から形成された。

【11. 学生との適切な距離感維持困難】 [13 記録単位：3.3%]

このカテゴリは、「学生との距離感が難しい」などの記述から形成された。

【12. 上司からの理不尽な業務配分の受理】 [12 記録単位：3.1%]

このカテゴリは、「一切説明がないまま業務を言いつけられるため、分からないまま仕事を行う」などの記述から形成された。

【13. 実習目標達成に向けた看護スタッフとの連携困難】 [10 記録単位：2.6%]

このカテゴリは、「実習指導者と学習環境を整えるための調整で、教育指導など、どこまで依頼してよいか判断に困る」などの記述から形成された。

【14. 新人看護学教員のための組織的な支援獲得

不可】 [10 記録単位：2.6%]

このカテゴリは、「新人教員の指導プログラムがない」などの記述から形成されていた。

【15. 教育・看護実践経験の乏しさによる学生への指導難航】 [9 記録単位：2.3%]

このカテゴリは、「看護学実習を行う際、自分の臨床看護師時代に経験できていない処置に対して学生指導が効果的にできないため困る」などの記述から形成された。

【16. 自身の専門分野とは異なる授業の実施難航】 [9 記録単位：2.3%]

このカテゴリは、「臨床経験のない領域のため、自分が何を授業すればいいのか全くわからない」などの記述から形成された。

【17. 教育と研究の両立困難】 [9 記録単位：2.3%]

このカテゴリは、「教育と研究との両立が困難」などの記述から形成された。

【18. 学校組織特有の慣習への円滑な適応困難】 [7 記録単位：1.8%]

このカテゴリは、「学校組織特有の慣習に慣れるのに時間がかかる」などの記述から形成された。

【19. 学生に教えるべき水準不明瞭と自身の思考伝達困難】 [7 記録単位：1.8%]

このカテゴリは、「学生への実習指導時、何をどこまで教えてよいのか、実習指導方法に悩む」などの記述から形成された。

【20. 多様な業務担当による優先度と時間の調整方法不明瞭】 [7 記録単位：1.8%]

このカテゴリは、「研究も含め時間の使い方が分からない」などの記述から形成された。

【21. 看護師国家試験対策の補講内容提供困難】 [7 記録単位：1.8%]

このカテゴリは、「看護師国家試験対策として、何を指導すべきかわからない」などの記述から形成された。

【22. 他者との教育観・看護観の不一致】

〔7 記録単位：1.8%〕

このカテゴリは、「教員毎に教育観が異なり戸惑う」などの記述から形成された。

【23. 実習指導者とは異なる教員としての実習指導困難】

〔6 記録単位：1.5%〕

このカテゴリは、「看護学実習での学生指導場面で、実習指導者と教員との役割の区別（ちがい）がうまくつかめず、教員としての指導方法に困る」などの記述から形成された。

【24. 授業準備と自己学習に投入すべき時間の過剰】

〔6 記録単位：1.5%〕

このカテゴリは、「授業資料の作成に時間を要し、自己学習が進められない」などの記述から形成された。

【25. 学生が主体的に学習できるような指導困難】

〔6 記録単位：1.5%〕

このカテゴリは、「学生が、看護学実習などつまづいている時にそれが理解できるように答えを教えるのではなく、学生が主体的に学習するよう関わり方が難しい」などの記述から形成された。

【26. 教育機関での年間予定把握不可による計画的な業務遂行困難】

〔6 記録単位：1.5%〕

このカテゴリは、「学校の流れ（1年間の予定や行事）が把握できず、先を見据えた計画を立てることができない」などの記述から形成された。

【27. グループワーク中の学生への効果的な助言不可】

〔5 記録単位：1.3%〕

このカテゴリは、「学部生の演習時、効果的な助言ができない」などの記述から形成された。

【28. 看護学生として備えるべき態度の指導方法不明瞭】

〔5 記録単位：1.3%〕

このカテゴリは、「看護学生として備わっていてほしい姿勢や態度についてどのように指導してよいかわからない」などの記述から形成された。

【29. 指導力不足による学生・院生への申し訳なさ】

〔4 記録単位：1.0%〕

このカテゴリは、「看護学実習時、他のグループ

は慣れた教員が担当していて、私は新人のため、教育力に差があり、学生に申し訳ない気持ちになる」などの記述から形成された。

【30. 教員としての自身の役割遂行状況の自己評価難航】

〔4 記録単位：1.0%〕

このカテゴリは、「授業終了後、自分自身で授業を振り返り自己評価する時、どのような形で評価すべきかわからない」などの記述から形成された。

【31. 上司・先輩との関係形成困難】

〔3 記録単位：0.8%〕

このカテゴリは、「先輩教員との距離感がわからない」などの記述から形成された。

【32. 実習期間の多様な業務重複による心身の苦痛】

〔3 記録単位：0.8%〕

このカテゴリは、「授業と看護学実習が重なった時、看護学実習に身が入らない」などの記述から形成された。

【33. 上司への適切な報告困難】

〔3 記録単位：0.8%〕

このカテゴリは、「上司へどこからどこまで報告しておかないといけないのか判断ができない」などの記述から形成された。

【34. 学生の看護現象の理解に結びつくような説明困難】

〔3 記録単位：0.8%〕

このカテゴリは、「看護学実習という授業をどのように展開すればよいのか、現象を構造的に伝える事の難しさ」などの記述から形成された。

【35. 教育理念やカリキュラムをふまえた指導への確信不可】

〔2 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「学校の教育理念や方針と自分の考え方が合っているか不安なまま行動する」などの記述から形成された。

【36. 臨床の工夫の説明欲求と学習内容強化義務との葛藤】

〔2 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「臨床の工夫も指導するのか、基礎教育での学習を強化するのか戸惑う」「特に

看護学実習の時に、専門性をどれだけ詳細に伝えて良いのか分からない。(私自身は、伝えていきたいという気持ち)」という記述から形成された。

【37. 担当グループ学生への公平な実習指導不可】

〔2 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「初めてひとりで看護学実習を担当した時、支援が必要な学生ばかり気になり、他の学生から、私たちの記録等の指導もして欲しいと言われる」などの記述から形成された。

【38. 実習中の不利益からの学生擁護不可】

〔2 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「実習指導の時、実習指導者とうまく調整ができないため、学生の思いや悩みが看護師に伝わらず学生が非難される」などの記述から形成された。

【39. 成績不振学生の保護者への対応不明瞭】

〔2 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「再実習学生の親への対応がわからない」などの記述から形成された。

【40. 実習施設の既知のスタッフとの関係性変化による適切な距離感維持困難】

〔1 記録単位：0.3%〕

このカテゴリは、「実習指導の際に、以前所属していた病院での看護学実習であるため、教員の立場でスタッフと接する距離感がなかなかつかめない」という記述から形成された。

【41. 授業計画案作成への時間投入による他教員への余儀なき業務依託】

〔1 記録単位：0.3%〕

このカテゴリは、「授業の構成に悩み、多くの時間がかかるため、他の業務は他の教員に任せ負担をかける」という記述から形成された。

【42. 研究業績不足による研究指導役割担当不可】

〔1 記録単位：0.3%〕

このカテゴリは、「研究実績が足りないため、指導に十分あたれない」という記述から形成された。

3. カテゴリの信頼性

カテゴリへの分類の一致率は、96.6%、87.2%であった。

VI. 考 察

本研究の結果は、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題を表す42カテゴリ、すなわち直面する問題42種類を明らかにした。そこで、明らかになった42種類の問題と文献を照合し、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題がどのような原因により生じるのかという特徴を考察する。以下、問題を【 】, 特徴を《 》により表す。

第1着目した問題は、【16. 自身の専門分野とは異なる授業の実施難航】である。教員の本務は、その教授活動によって学生の学習目標達成を支援すること¹⁹⁾である。その過程は、教育目標達成を目指し、目的、計画的に展開される²⁰⁾。教員は、授業を通して教育目標の達成に必要な内容(教育内容)を伝えること²¹⁾を求められるため、教育内容に精通していなければならない²²⁾ことを示す。【16.】は、新人看護学教員が、自身の専門とは異なる授業の実施の実施に困難を来すという問題を表す。これは、【16.】が、教育内容に関する知識の乏しさにより生じる問題であることを示す。先行研究²³⁾は、新人を含む看護専門学校教員の約7割が、自身の専門分野とは異なる授業を担当しなければならないことを明らかにした。これは、新人看護学教員が【16.】に直面していることを示す。

一方、看護学教員は、教育内容に精通していても、それを伝える方法を修得していなければ、必要な内容を伝えられない。そのため、教員は、授業成立に向けて、次の要件を求められる²⁴⁾。それは、上記の「①教育内容への精通」とともに「②授業設計に必要な基礎的知識の修得」「③授業展開に必要な技術の修得」「④授業評価のための知識と技

術の修得」「⑤学習理論，レディネスの把握，教育評価に関する理解」である。

次に着目した問題は，【1. 授業設計と展開方法不明瞭】【35. 教育理念やカリキュラムをふまえた指導への確信不可】【28. 看護学生として備えるべき態度の指導方法不明瞭】である。【1.】の「授業設計の方法不明瞭」は，新人看護学教員が，授業設計の方法が分からないという問題を表す。授業設計とは，授業の実施に先立って行われる授業についての準備活動²⁵⁾である。また，【35.】は，教育理念やカリキュラムに沿った指導に自信が持てないという問題を表す。教育理念²⁶⁾とは，その教育機関の教授・学習の本質についての考え，カリキュラム²⁷⁾とは，学校の教育目的に即して望ましい成長・発達（変化）を遂げるために必要な諸経験を，彼らに提供する意図的，組織的な教育内容の全体計画である。さらに，【28.】は，看護学生として備えるべき態度の指導方法が分からないという問題を表す。教育目標分類学は，教育の目標を情意領域，認知領域，精神運動領域²⁸⁾に分類され，このうちの情意領域は，態度の発達に関わる教育目標を取り扱う領域²⁹⁾である。これは，教育目標分類学の知識が，授業設計の目標設定に必要であることを示す。これらは，【1.】【35.】【28.】が，上述の授業成立の5要件のうち，「②授業設計に必要な基礎的知識の修得」の充足不十分により生じるという特徴を持つことを示す。

次に着目した問題は，【1. 授業設計と展開方法不明瞭】【38. 実習中の不利益からの学生擁護不可】【34. 学生の看護現象の理解に結びつくような説明不可】【37. 担当グループ学生への公平な指導不可】【27. グループワーク中の学生への効果的な助言不可】である。【1.】の「授業展開の方法不明瞭」は，新人看護学教員が，授業展開の方法が分からないという問題を表す。また，【38.】【34.】は看護学実習中の必要不可欠な教授活動を展開できていないという問題を表す。先行研究³⁰⁾

は，教員の『予測される危険からの学生擁護』『抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合』という教授活動が，看護学実習中の目標達成に必要不可欠であることを明らかにした。さらに，【37.】は，新人看護学教員が，学生に公平な指導ができないという問題を表す。「どの学生にも平等に接する」という行動は，看護学生が実習過程を評価する際の1基準³¹⁾である。加えて，【27.】は，学生への効果的な助言ができないという問題を表す。グループワーク中の助言は，学生の目標達成に必要なかつ重要な教員の行動³²⁾である。これらは，【1.】【38.】【34.】【37.】【27.】が，「③授業展開に必要な技術の修得」の充足不十分により生じる問題であることを示す。

次に着目した問題は，【8. 実施した指導と評価の適切性への確信不可】【25. 学生が主体的に学習できるような指導困難】【2. 学生の個別性把握とそれに応じた指導難航】である。【8.】は，新人看護学教員が，自身の指導や評価に確信を持てないという問題を表す。【25.】は，新人看護学教員が，学生が主体的学習につながる指導に困難を来すという問題を表す。主体性³³⁾とは，自ら進んで責任を持ち行動し得る能力であり，学習意欲と深く関係している。学習意欲³⁴⁾とは，自発的，能動的に学習しようとする意欲・意志であり，学習に関する理論的知識である。これらは，【8.】【25.】【2.】が，「⑤学習理論，レディネスの把握，教育評価に関する理解」の充足不十分により生じる問題であることを示す。

以上は，【16.】【1.】【35.】【28.】【38.】【34.】【37.】【27.】【8.】【25.】【2.】という問題が，《授業成立に向けて教員に求められる要件「①教育内容への精通」「②授業設計に必要な基礎的知識の修得」「③授業展開に必要な技術の修得」「④授業評価のための知識と技術の修得」「⑤学習理論，レディネスの把握，教育評価に関する理解」の充足不十分》により生じるという特徴を持つことを示

す。

第2に着目した問題は、【6. 臨床看護師とは異なる教員としての業務への適応困難】【3. 業務内容不明瞭なままでの業務遂行】である。【6.】は、新人看護学教員が、教員として何をすればよいかを理解できず、業務への適応に困難を来すという問題を表す。また、【3.】は、新人看護学教員が、仕事内容を理解できないまま、業務を遂行しているという問題を示す。これらは、教育の場の「業務」の理解不足により生じるという共通性を持つ。

次に着目した問題は、【23. 実習指導者とは異なる教員としての実習指導困難】である。これは、新人看護学教員が、教員としての実習指導の展開に困難を来すという問題を表す。看護学実習は、看護目標達成に向かいつつ、学生の学習目標達成を目指すという目標の二重構造を持つ授業³⁵⁾である。そのため、新人看護学教員は、自己の役割が、学生の実習目標達成支援へと移行していることに気づきにくい³⁶⁾。これは、【23.】が、「役割」の理解不足により生じる問題であることを示す。

次に着目した問題は、【19. 学生に教えるべき水準不明瞭と自身の思考伝達困難】【36. 臨床の工夫の説明欲求と学習内容強化義務との葛藤】【30. 教員としての自身の役割遂行状況の自己評価難航】である。教育目標は、何をどこまで学ぶのか、教えるのかを決定し、設定される³⁷⁾。【19.】は、新人看護学教員が、学生に何をどのように教えるのかその水準が分からないという問題を表し、【36.】は、学習内容を強化する必要性を知りながらも、臨床での工夫も説明したいという問題を表す。さらに、【30.】は、教員としての役割を遂行出来ているのか評価も難航するという問題を表す。これらは、【19.】【36.】【30.】が、「目指すべき目標」の理解不足により生じる問題であることを示す。

次に着目した問題は、【26. 教育機関での年間予定把握不可による計画的な業務遂行困難】である。先行研究³⁸⁾は、新人看護学教員が、教員になった

当初は、業務内容や役割を理解できずに業務を滞らせるものの、一年間の学事進行に伴い、教員の業務とその遂行方法への理解を深めることを明らかにした。これは、【26.】が、教員としての「年間予定」の理解不足により生じている問題であることを示す。

以上は、【6.】【3.】【23.】【19.】【36.】【30.】【26.】という問題が、《教員としての「業務」「役割」「目指すべき教育目標」「年間予定」の理解不足》により生じるという特徴を持つことを示す。

第3に着目した問題は、【11. 学生との適切な距離感維持困難】【39. 成績不振学生の保護者への対応不明瞭】【31. 上司・先輩との関係形成困難】である。【11.】は、新人看護学教員が、学生と適切に関わることが難しいという問題を表す。また、【39.】は、保護者への対応方法が分からないという問題を表す。新人看護学教員は、これまでとは異なる対象者との相互行為を求められる。先行研究³⁹⁾は、新人看護学教員が、学生や保護者への対応に困難を抱えていることを明らかにした。さらに、【31.】は、上司や先輩との相互行為の展開が難しいという問題を表す。看護学教員の離職に関する論文は、教員人数が、病院の時と違い非常に少ない⁴⁰⁾と悩んでいることを明らかにした。これは、職場内に気軽に相互行為を展開できる対象者の人数が少ない現状を示す。

これらは、【11.】【39.】【31.】が、新人看護学教員が教育の場への移行に伴う相互行為の対象者の変化により生じる問題であることを示す。

次に着目した問題は、【22. 他者との教育観・看護観の不一致】【13. 実習目標達成に向けた看護スタッフとの連携困難】【40. 実習施設の既知のスタッフとの関係性変化による適切な距離感維持困難】である。【22.】の「観」とは、ものごとに対する考え方⁴¹⁾であり、教育や看護に対する考え方を示す。これは、考え方の異なる他者との相互行為の展開に問題を感じていることを表す。これ

は、【22.】が、臨床の場から教育の場への移行に伴う相互行為の対象者の変化により生じる問題であることを示す。また、【13.】は、新人看護学教員が、実習施設の看護スタッフと実習目標達成に向けて連携することが難しいという問題を表す。連携⁴²⁾とは、同じ目的で何事かをしようとするものが、連絡をとり合ってそれを行うことである。しかし、新人看護学教員の役割が、学生の実習目標達成支援へと移行しているため、看護スタッフとの連携に困難を感じていることを示す。さらに、【40.】は、実習施設の知り合いの看護スタッフとの適切な関わりが難しいという問題を表す。これらは、【13.】【40.】が、臨床の場から教育の場への移行に伴う相互行為の目的変化により生じる問題であることを示す。

以上は、【11.】【39.】【31.】【22.】【13.】【40.】という問題が、《臨床の場から教育の場への移行に伴う相互行為の対象者・目的の変化》により生じるという特徴を持つことを示す。

第4に着目した問題は、【18. 学校組織特有の慣習への円滑な適応困難】である。慣習⁴³⁾とは、ある社会においてその成員が反復した結果、自然発生的に規則性を持つにいたった社会的行動様式である。これは、単に職場を移すことなく、臨床の場とは異なる学校組織の慣習への移行を示す。これは、【18.】が、臨床の慣習から学校組織特有の慣習への移行により生じる問題であることを示す。

次に着目した問題は、【33. 上司への適切な報告困難】である。報告は、情報を共有していくための基本的活動⁴⁴⁾の1つであり、臨床看護師の看護行為の大部分を占める⁴⁵⁾ことを明らかにした。これは、臨床看護師が、役割遂行上、報告を日々行っていることを示す。しかし、先行研究⁴⁶⁾は、新人看護学教員が「臨床で出来ていたことも出来ない」などの困難を感じることを明らかにした。これは、臨床看護師が日々行ってきた報告であっても、学

校組織の慣習に基づいた時、出来なくなるという状況を示す。これは、【33.】が、新人看護学教員が、上司に報告すべき内容が分からず困難をきたすという問題を表す。

以上は、【18.】【33.】という問題が、《臨床の慣習から学校組織特有の慣習への移行》により生じるという特徴を持つことを示す。

第5に着目した問題は、【21. 看護師国家試験対策の補講内容提供困難】である。国家試験の合格率は、受験生が受験する学校を選択する重要事項⁴⁷⁾となり得る。教員は、合格率を高めるため、看護師国家試験の担当としてその対策を講じている⁴⁸⁾。先述した通り、新人看護学教員は、【1. 授業設計と展開方法不明瞭】という問題に直面しており、さらに困難をきたしているという問題を表す。

以上は、【21.】という問題が、《看護師国家試験担当という付加的役割の余儀なき遂行》により生じるという特徴を持つことを示す。

第6に着目した問題は、【4. 他教員からの適切な支援獲得困難による円滑な業務遂行不可】【10. 教授活動の改善に活用可能な他教員からの支援獲得困難】【9. 他教員との接触機会稀少による必要な教示獲得困難】【14. 新人看護学教員のための組織的な支援獲得不可】である。教示⁴⁹⁾とは、知識や方法を教え示す。これは、新人看護学教員が、業務を遂行し、学生指導の方向性を決定するための知識や方法に関し、先輩教員から教えを受けることである。これらは、【4.】【10.】【9.】が、このような支援の獲得が難しいという問題を表す。また、【14.】は、新人看護学教員が、臨床のような組織の体制や新人プログラムの提供がなされないという問題を表す。これは、【14.】が、新人看護学教員が、組織からの支援がないことにより生じる問題であることを示す。

以上は、【4.】【10.】【9.】【14.】という問題が、《他教員や組織からの支援獲得困難》により生じるという特徴を持つことを示す。

第7に着目した問題は、【15. 教育・看護実践経験の乏しさによる学生への指導難航】【42. 研究業績不足による研究指導役割担当不可】【29. 指導力不足による学生・院生への申し訳なさ】である。【15.】の「教育経験の乏しさ」は、授業方法に関する知識⁵⁰⁾不足につながりやすく、「看護実践経験の乏しさ」は、授業内容に関する知識⁵¹⁾不足につながりやすい。【15.】は、教育・看護実践経験の不足により学生指導に難航するという問題を表す。

また、【42.】は、研究経験が乏しく研究指導に困難をきたすという問題を表す。大学院設置基準⁵²⁾は、修士課程を担当する教員の満たすべき1条件を「博士の学位を有し、研究上の業績を有するもの」としている。これは、研究指導役割を担うためには、研究経験が不可欠であることを示す。これらは、【15.】【42.】が、教育・看護実践経験・研究経験の乏しさにより生じる問題であることを示す。

さらに、【29.】は、教育経験の不足により生じる問題を表す。先行研究⁵³⁾は、新人看護学教員が、ベテラン教員と自身の指導の違いを自覚し、担当学生に申し訳ないと感じることを明らかにした。

以上は、【15.】【42.】【29.】という問題が、《教育・看護実践・研究経験の乏しさ》により生じるという特徴を持つことを示す。

最後に着目した問題は、【24. 授業準備と自己学習に投入すべき時間の過剰】【7. 教育に関する必要知識不足下での余儀なき授業実施】【12. 上司からの理不尽な業務配分の受理】【20. 多様な業務担当による優先度と時間の調整不明瞭】である。先行研究⁵⁴⁾は、新人看護学教員が、教育内容の精選や授業方法の難しさを感じ、授業計画案作成に多くの時間を費やすことを明らかにした。【24.】は、授業準備や自己学習に多くの時間を要するという問題を表す。また、【7.】は、新人看護学教員が、知識不足のまま授業を実施するとい

う問題を表す。さらに、【12.】は、新人看護学教員が自分の力量を超えた業務や具体的な説明がないまま仕事を受理するという問題を表す。加えて、【20.】は、新人看護学教員が、業務を調整できず、時間を作れないという問題を表す。これらは、【24.】【7.】【12.】【20.】が、担当する業務の時間を調整し、時間を捻出する方法の修得不十分により生じる問題であることを示す。

次に着目した問題は、【17. 教育と研究の両立困難】【5. 業務量過剰による私的時間での余儀なき業務遂行】【32. 実習期間の多様な業務重複による心身の苦痛】【41. 授業計画案作成への時間投入による他教員への余儀なき業務依頼】である。【17.】は、新人看護学教員が、研究の時間を取れず予定通りに進められない⁵⁵⁾ため、【5.】は、仕事を持ち帰り、私的時間を投入することを示す。また、【32.】は、看護学実習期間中に多様な業務が重なり精神的・肉体的に辛いことを示し、【41.】は、やむを得ず他教員へ自身の業務を依頼することを示す。これらは、【17.】【5.】【32.】【41.】が、時間を捻出する方法の修得不十分に起因して生じる影響という共通性をもつ。

以上は、【24.】【7.】【12.】【20.】【17.】【5.】【32.】【41.】という問題が、《担当する業務の時間を調整し、時間を捻出する方法の修得不十分》により生じるという特徴を持つことを示す。

VII. 結 論

1. 本研究の結果は、新人看護学教員が役割遂行上直面する問題42カテゴリ、すなわち42種類の問題を明らかにした。また、Scott, W.A. の式によるカテゴリへの一致率は、96.6%, 87.2%であり、カテゴリが信頼性を確保していることを示した。
2. 全国の新人看護学教員が役割遂行上直面する42種類の問題は、次の8つの原因により生じ

るという特徴を持つことを示した。それは、《Ⅰ. 授業成立に向けて教員に求められる要件「①教育内容への精通」「②授業設計に必要な基礎的知識の修得」「③授業展開に必要な技術の修得」「④授業評価のための知識と技術の修得」「⑤学習理論、レディネスの把握、教育評価に関する理解」の充足不十分》《Ⅱ. 教員としての「業務」「役割」「目指すべき教育目標」「年間予定」の理解不足》《Ⅲ. 臨床の場から教育の場への移行に伴う相互行為の対象者・目的の変化》《Ⅳ. 臨床の慣習から学校組織特有の慣習への移行》《Ⅴ. 看護師国家試験担当という付加的役割の余儀なき遂行》《Ⅵ. 他教員や組織からの支援獲得困難》《Ⅶ. 教育・看護実践・研究経験の乏しさ》《Ⅷ. 担当する業務の時間を調整し、時間を捻出する方法の修得不十分》により生じるという特徴である。

3. 本研究の成果は、全国の新入看護学教員自身が自身の役割遂行上直面する問題を客観的に理解することに役立つ。また、効果的な役割遂行に向けて、問題解決の方向性を自ら見出すために活用できる知識となる。

謝 辞

本研究の結果は、全国の看護基礎教育機関に所属する教員の皆様からいただいた貴重なデータに支えられている。本研究に関わった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 橋本笑子, 加藤かすみ, 伴藤典子他 (2011): 新人看護教員の講義, 実習, 生活指導で困っていることの実態, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 7: 105-112
- 2) 伊藤良子, 大町弥生 (2009): 看護系大学の新人教員が看護学実習指導において感じた困難の要因, 看護教育, 50: 414-422
- 3) 前掲書 1), 105-112
- 4) 片岡三佳, 西山ゆかり, 千葉 進他 (2009): 看護系大学に勤務する新人教員の教育・研究活動に対する悩み, JN: The Journal of Nursing Investigation, 7: 23-29
- 5) 西田敦子, 中江秀美, 山下久美子他 (2011): 新人看護教員が役割遂行をする上で感じる困難性の分析, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 7(12): 113-124
- 6) 前掲書 2), 414-422
- 7) 前掲書 5), 113-124
- 8) 前掲書 1), 105-112
- 9) 前掲書 4), 23-29
- 10) 村上みち子, 野本百合子, 舟島なをみ (2005): 看護学教員が職業上直面する問題の解明, 日本看護学教育学会第 15 回学術集会講演集: 181
- 11) 金谷悦子, 鈴木美和, 舟島なをみ (2005): 看護系大学・短期大学に所属する新人教員の職業経験に関する研究—5 年以上の看護実践経験を持つ教員に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 14(1): 23-36
- 12) 森岡清美, 塩原 勉, 本間康平編 (2006): 新社会学辞典「役割遂行」の項, 1433-1434, 有閑社, 東京
- 13) 見田宗介, 栗原 彬, 田中義久編 (2006): 社会学事典, 「役割」の項, 878, 弘文堂, 東京
- 14) 梅津八三他監 (2004): 心理学事典, 「問題解決」の項, 789-791, 平凡社, 東京
- 15) 中島義明, 子安増生, 繁耕算男他編 (1999): 心理学辞典, 「問題解決」の項, 847-848, 有斐閣, 東京
- 16) Neisser, U. (1982): Memory Observed: Remembering in Natural Contexts, W.H. Freeman and Company, 85; 富田達彦訳 (1991): 観察された記憶 (上)—自然文脈での想起, 103, 誠信書

- 房, 東京
- 17) 舟島なをみ (2010): 看護教育学研究—発見・創造・証明の過程 第2版, 227-248, 医学書院, 東京
- 18) 前掲書 17), 227-248
- 19) 前掲書 17), 227-248
- 20) 舟島なをみ監修 (2013): 看護学教育における授業展開 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて, 3, 医学書院, 東京
- 21) 前掲書 20), 5
- 22) 前掲書 20), 5
- 23) 安藤真美, 三浦弘恵 (2014): 看護専門学校教員の講義準備に関する研究—臨床経験と専門性の異なる領域の講義を担う教員を対象として, 福島県立医科大学看護学部紀要 16: 57-67
- 24) 前掲書 20), 5
- 25) 細谷敏夫, 河野重男, 奥田真丈他編 (1990): 新教育学大事典 4, 「授業設計」の項, 69, 第一法規出版, 東京
- 26) Torres, G., Stanton, M. (1982); 近藤潤子他訳 (1988): 看護教育カリキュラム—その作成過程, 31, 医学書院, 東京
- 27) 前掲書 25), 2, 「カリキュラム」の項, 40
- 28) Marilyn H. Oermann, Kathleen B. Gaberson,; Evaluation and Testing in Nursing Education: 舟島なをみ監訳 (2009): 看護学教育における講義・演習・実習の評価, 14-23, 医学書院, 東京
- 29) 前掲書 28), 17-18
- 30) 松田安弘, 中山登志子, 亀岡智美他 (2005): 看護学実習の目標達成に必要な教授活動の解明: 質的研究 3 件のメタ統合を通して, 看護教育学研究, 14(1): 51-64,
- 31) 中谷啓子, 亀岡智美, 鈴木美和他 (1999): [看護系大学自己点検・評価のための測定用具] 看護系大学授業過程評価スケール〈実習用〉, Quality nursing, 5(5): 45-52
- 32) 舟島なをみ監修 (2015): 看護実践・教育のための測定用具ファイル—開発過程から活用の実際まで—第3版, 222, 医学書院, 東京
- 33) 前掲書 25), 3, 「自主性・主体性」の項, 416-418
- 34) 前掲書 20), 5
- 35) 前掲書 20), 5
- 36) 前掲書 20), 5
- 37) 前掲書 20), 5
- 38) 前掲書 11), 23-36
- 39) 前掲書 4), 23-29
- 40) 上山悦代 (2010): 看護教員が辞めたいとき その5つのケース, 看護教育, 51(11): 948-953
- 41) 見坊豪紀, 市川 孝, 飛田良文他編 (2001): 国語辞典 第五版, 「観」の項, 246, 三省堂, 東京
- 42) 西尾 実, 岩淵悦太郎, 水谷静夫編 (2011): 国語辞典 第7版 新版, 「連携」の項, 1364, 岩波書店, 東京
- 43) 前掲書 13), 「慣習」の項, 167-168
- 44) 小山真理子編 (2012): 看護学基礎テキスト 第4巻 看護の機能と方法, 163, 日本看護協会出版会, 東京
- 45) 大場 薫, 佐々木由紀, 長能みゆき他 (2016): タイムスタディによる看護業務量調査, 東邦看護学会誌, 13: 15-22
- 46) 前掲書 5), 113-124
- 47) 石井秀宗, 椎名久美子, 柳井晴夫 (2003): 看護大学生の学習活動と学習意欲等に関する研究, Quality Nursing 9(11): 48-61
- 48) 尾田 恵 (2014): 合格へ導くために教員全員で支援, 看護教育, 55(6): 494-496
- 49) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館 国語辞典編集部編 (2001): 日本国語大辞典 第二版 第四巻「教示」の項, 438, 小学館, 東京
- 50) 前掲書 20), 23

- 51) 前掲書 20), 23
- 52) 解説教育六法編集委員会 (2016): 解説教育六法平成 28 年度版, 大学院設置基準 第 3 章, 「教員組織」の項, 第九条, 300, 三省堂, 東京
- 53) 前掲書 5), 113-124
- 54) 前掲書 5), 113-124
- 55) 前掲書 4), 23-29

Clarification of Problems Encountered by Role Performance Novice Nursing Faculty Member Belonging to Nursing Colleges, Junior Colleges and Vocational Schools in Japan

Mihoko Takahashi, Nobuko Yamashita, Yasuhiro Matsuda
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objectives: This research aimed to clarify the problems faced by novice nursing faculty member who transferred from clinical to educational setting and to discuss their characteristics.

Methods: Questionnaires were distributed by post to 543 nursing faculty member in charge of classes at nursing universities, junior colleges, and diploma programs across Japan. A total of 330 responses were received (response rate: 60.8%). The remaining 213, which contained responses to open-ended questions, were analyzed by using content analysis for nursing education based on Berelson's methodology.

Results: 42 categories were formed, including "education/nursing practical experience lacks guidance for students" and "difficult to balance education and research."

Conclusion: A total of 42 types of problems encountered by novice nursing faculty member in educational settings were revealed. These problems were characterized by eight factors, including "lack of education/nursing practice/research experience". The results of this research provide material for objectively understanding the problems faced by novice nursing faculty member, and can help them solve these problems on their own.

Keywords: novice nursing faculty member, role performance, problem encountered